The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マラルメにおける〈不毛性〉について
Author(s)	加覧, 伸彦
Citation	Gallia. 1975, 14, p. 41-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6243
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マラメルにおける〈不毛性〉について

加　覧　伸　彦

詩人としてのマラルメの目標は何であったろうか？1867年，アンリ・カザリスあてに，彼は次のように書いている．“美しか，存在していないのだ．そして美は唯一の完璧な表現しか持っていない．それがポエジーだ”．この徹底した唯美主義的信条告白において我々はマラルメの根源的思想をとらえることができる．日常存在しているかにみえるさまざまな存在は，美という唯一の実体の仮象にほかならず，この美という実体をとらえることが，詩の使命なのである．従って詩こそが，人間が営みうる唯一の有意味な行為であるとマラルメは考えるのである．

だが，では美とは一体何であろうか？初期のマラルメは青空のイマージュにおいて美を措定し，この青空へ到達しようと試みるが，結局挫折してしまう．青空へ到達せんとするこの企ての挫折の過程はよく知られているので，ここでは詳しくのべないが，ただ我々の興味をひく点は青空の持つ特質である．青空は我々のはるか頭上に存在しているという端的な事実によって，超越的な美と定義することができるが，この超越性は単に偶然的なものであろうか？むしろ美そのものの超越性を象徴しているのではないだろうか？更に言えば，青空は，それ自体としては存在していず，地上の我々との距離をおいた関係においてはじめて青空なのである．青空そのものとは無であり，虚無である．とすれば，美とは結局虚無であると結論してよいのであろうか？この問題は，これから我々が検討しようと思うエロディアッド詩篇において明瞭なかたちであらわれてくる．美の超越的，外在的あらわれである青空を断念したエロディアッドは自ら美の化身たらんとして努力を重ねるのであるが，彼女は美の超越性を克服することができるであろうか？美が超越的であるという意味では彼女の試みは最初から挫折を宿命づけられているのではないだろうか？これが我々の考察の主題であり，エロディアッドがそこで生きることを強いられる≪不毛性≫の意義

を解明してみようと思う．

エロディアッドが，美を体現しようとし，他者をよせつけず，次第に孤独になり不毛性のなかに陥っていくありさまは，既に「エロディアッド古序曲」において示されている．冒頭の数行において，彼女は住みなれた城の塔を去り，自分の心の中に閉じこもっていることがうたわれる．美を体現せんとするエロディアッドの最初の努力はまず自らの純粋性を獲得することである．このためにはまず意識に介在してくる他者と絶縁しなければならない．だが意識が意識内容を拒否するにつれて不毛なものとなるのは必然的ななりゆきである．また，主体としての意識が客体としての対象を拒否するにつれて，この捨て去られた対象の不在そのものが普遍的様相を帯び，主体である意識を消滅へと脅かすのである．「古序曲」は全篇にわたって不在の全的侵入のしるしにみちており，エロディアッドを今まで保護してくれていたものさえ，いまや不在のうちへ没してしまっているのである．この不在の保護物の代表として3つのイマージュがあらわれる．その第一が彼女のベッドである．彼女がそこで安らかな眠りを愉しんだであろうこのベッドはもはや革製の本，彼女の夢想を育んでくれた貴重な魔術書を持たず，エロディアッドが死の世界へ入っていくのをひきとどめることができない．むしろ，今やこのベッドそのものが墓所めいた趣きを呈しており，彼女の死が近いことを予兆しているのである．第二のイマージュはエロディアッドの守護天使であるが，青空を放棄し，自らが美の化身たらんと欲しているエロディアッドは，青空の住人である天使をうけいれることを肯じ得ないのである．三番目のイマージュは彼女の父親である．エロディアッドの日常生活における現実的保護者であり，一家の長として生命力の象徴である父親ならば，彼女の死への歩みをひきとどめ得るかもしれぬが，この父も今は戦闘に出かけていって不在なのである．そのうえ，この詩篇でうたわれる父の姿は生命力を示しているというよりはむしろ死者のイマージュに近づいており，この事実がエロディアッドの不吉な運命の抗い難い力をあらわしているように思われる．「古序曲」の詩篇においては，ほとんどすべてのイマージュが破局，すなわちエロディアッドの死の前兆を示している．しかし例外として，エロデ

ィアッドの乳母があげられる．この乳母は本来ならば，父親と対をなしてエロディアッドの母親の役割をひきうけていたはずであり，それ故にこそ，彼女はエロディアッドに最後までつきそう力を持ち得ているのであろう．だが詩篇にも示されるとおり，乳母において，彼女の母性の象徴であり，力である乳房はとうの昔に涸れてしまっており，彼女はエロディアッドの母親としての力を喪失してしまっているのである．現在の彼女はエロディアッドの運命に対して無力であり，呪文としてのしどろもどろの声しか持たず，しかも彼女自身この声が果して本当に自らの声であるかということにすら自信を持てないのであるから，彼女の無力さはいっそう明らかなのである．かくして，「古序曲」は“すべては予兆であり，悪夢なのです”という悲劇的予感のうちに終始しているのである．

そして「舞台」においては，まさしく，瀕死の姿をしたエロディアッド自身が登場するのである．

Tu vis! ou vois-je ici l'ombre d'une princesse?
A mes lèvres tes doigts et leurs bagues et cesse
De marcher dans un âge ignoré...

冒頭において既にエロディアッドは，乳母をおののかせる亡霊，即ち生の名残りを持たぬものとしてあらわれる．むろんたとえ亡霊としてではあれ，生者の世界へ姿をみせている以上，彼女は完全に死んでしまっているわけではなく，乳母は彼女を生にとどめるべく最後の努力を試みるのである．だが前述したように，乳母には彼女の運命に抗する力はなく，ただエロディアッドの凄絶に美しい姿を前に，おそれおののくだけである。実際，己れ以外のすべてを拒否し，それ故に極端な不毛性にさらされているエロディアッドは，瀕死ながらも完璧な美に近い姿を示すわけである．この美をさらに絶対的＝純粋なものにするため，彼女は誰にも近づくことを許さず，彼女に無縁なものはほとんどすべて“ぼろぼろの残骸”となって不在の中へ没し去ってしまっているのである。「私は人間的なものを何も望みません」という，彼女の断固とした他者拒絶は，自己の純粋性をまもろうとする決意のあらわれなのである．たとえ彼女が昔飲ん

だ乳母の乳を思い出すこと，即ちいくらか人間的になることがあっても，その時ですら，彼女は彫像のように無感動であり，生とは遥か隔った姿なのである．純粋性を求める彼女にとって不純な要素である他者を許容することは，美の化身として死ぬ，という理想の死とは正反対のものであり，もっとも望ましからざる自殺行為なのである．乳母がエロディアッドをひきとどめようとしてなす，すべての行為は，この不純な死を意味しているのであり，エロディアッドが全力を尽して避けるのもその故なのである．美はそれ自身を存在基盤，存在理由としていなければならず，他の要素をうけいれてはならない．さもなくば美は即座に美ではなくなってしまうであろう．エロディアッドのナルシシスムとよばれているものは，このような破滅を拒否せんとする意志のあらわれであり，自己の孤独の断固とした受容と確認である．

Oui, c'est pour moi, pour moi, que je fleuris, déserte!

エロディアッドの置かれているこの孤独，これこそ，彼女に純粋性を保証してくれるのである．己れ以外の目的を持たぬ．この純粋性は確かに無益であり，不毛である．そのうえ究極的には死へと通じるのであるから，恐怖をそそるものですらある．エロディアッドが純粋意識を求める以上，彼女は他のすべてのものを捨て去らねばならない．しかし，意識とは本質的に常に何かについての意識である．意識であるためには，意識ではないところのもの，即ちノエマを有していなければならない．ノエマを持たない純粋意識とは，意識の消滅，すなわち死に他ならないのである．周知の言いまわしに従うならば“虚無の意識は意識の虚無しかあり得ない”のである．だがエロディアッドは意欲してこの虚無へ進んでゆく．彼女の状況の不毛性，無益性こそ彼女に自らの純粋性を教えてくれるものであり，彼女がそれらを好み，それらに讃美を捧げるのも当然と言えるであろう．

J'aime l'horreur d'être vierge et je veux
Vivre parmi l'effroi que me font mes cheveux
Pour, le soir, retirée en ma couche, reptile
Inviolé sentir en la chair inutile
Le froid scintillement de ta pâle clarté

このように純粋性と無益性がエロディアッドに恐怖の念をおぼえさせるのであるが，しかし同時に，それらこそ彼女の犯し難い特質を形成しているのであって，その意味で彼女を彼女たらしめているのである．「舞台」詩篇における二つの主要なイマージュ，金髪と鏡は彼女におののきを感じさせる役割を担っているのであるが，このおののきこそ純粋性の証明に他ならないのである．有名な詩句のなかでエロディアッドはこううたう．

Le blond torrent de mes cheveux immaculés
Quand il baigne mon corps solitaire le glace
D'horreur, et mes cheveux que la lumière enlace
Sont immortels.

たとえ彼女の金髪がおそれを抱かせるにしても，このおそれが一方では彼女の純粋性を証明しているのであり，従って彼女は自分の髪が，その純粋性を守り，またそのことによって彼女におそれを感じさせるために，いつまでも不毛であることを願うのである．

Je veux que mes cheveux qui ne sont pas des fleurs
A répandre l'oubli des humaines douleurs,
Mais de l'or, à jamais vierge des aromates,
Dans leurs éclairs cruels et dans leurs pâleurs mates,
Observent la froideur stérile du métal,
Vous ayant reflétés, joyaux du mur natal,
Armes, vases depuis ma solitaire enfance.

これらの詩句においてもわかるようにエロディアッドの髪は，人間の苦悩を慰めるような美しさは備えていず，黄金の冷やかで，非人間的な不毛性にみたされている．J.-P.リシャールの指摘する通り，ここにおいては，金属，武器，宝石といった無機的物質の光沢と冷やかさが髪に移っており，その非人間的特質を強調している．人間的なものを強く拒否するエロディアッドが，これら無機物を愛するのは当然と言えよう．なぜなら，これらの物質はその特質からして永遠に存在しうるものであり，この永遠性こそ，美の本質でもあるからである．エロディアッド自身，自分の髪を“不滅の”と形容しているのはいまの詩節

でみたとおりである．また，これらの物質は，人間的なものとは異り，彼女の意識の純粋性を乱すこともない．なぜなら，意識を乱すものは，意識と同質のものでなければならないからである．それは他者すなわち私とは別の意識である．また，それとは別に香料なども，意識の明晰さを乱すものとして斥けられる．我々の意識は事物に脅かされるということはほとんどない．しかし，他者のまなざしは，私にとって，ひとつのつまずきである．これがエロディアッドの無機物偏愛の理由であろう．そし，この無機的なものの一つのイマージュとして，金髪がうたわれるのであり，金は確かに永遠性の象徴なのである．この髪は，エロディアッドに対して，触感によるおののきを感じさせるが，これに対して，もう一つの主要なイマージュである鏡は，視覚的おののきをエロディアッドにもたらすのである．

O miroir!
Eau froide par l'ennui dans ton cadre gelée
Que de fois et pendant des heures, désolée
Des songes et cherchant mes souvenirs qui sont
Comme des feuilles sous ta glace au trou profond,
Je m'apparus en toi comme une ombre lointaine,
Mais, horreur! des soirs, dans ta sévère fontaine,
J'ai de mon rêve épars connu la nudité!

髪が，金属の堅さと冷たさを持っていたとすれば，この鏡は，氷の堅さと冷たさを持っており，そのことでエロディアッドにとっては，おののきを感じるに足るのである．この鏡のなかに，彼女は自己の思い出を求める．これは自己確認の行為である．しかし，彼女が見出すのは木の葉にも似た散乱した思い出と，“深い穴”だけであって，自己確認を果すには到らない．鏡が，本来自意識ときわめて似た構造を有することは周知の通りである．自意識において人が己れを意識するのと同様に，鏡において人は自己を再認する．だが，エロディアッドのこの鏡は自己再認を許すどころか，虚無へ通じる深い穴しか持っていないのである．この鏡が彼女に自己再認を許すとしても，それは散乱した夢の裸形の姿としてであり，エロディアッドの恐怖をうみだすものとしてである．こ

の鏡は実在を映す鏡ではなく，そこに映されるべき実在が非在へと導かれる鏡である．これは，他者をきりすて，意識そのものになりきろうとするエロディアッド自身の意識と同じ構造を持っているのである．従って，エロディアッドがこの鏡に自己再認を求めても無駄である．確かに鏡にうつった自分の姿に対して彼女はこう呼びかける．

Toi qui te meurs, toi qui brûles de chasteté,
Nuit blanche de glaçons et de neige cruelle!
Et ta soeur solitaire, ô ma soeur éternelle
Mon rêve montera vers toi:

鏡のなかのエロディアッドは完璧な美に近い姿である．だが，この美は実在としての美ではなく，虚無に無限に接近した美である．それに，鏡の像は，決して私ではない．それは存在せぬものとしての私である．美と虚無の絆をエロディアッド自身あれほどよく知っているではないか．だが，美と虚無が接近すれば美の永遠性が危くなってくる．なぜなら，完璧な美とは死に他ならないからである．もしエロデイアッドが真に純粋な美を体現しようと欲するならば，彼女は死ななければならない．論理的には当然の帰結であるし，彼女自身そのことを充分に予感している．しかし．最後の瞬間において，彼女は死ぬことを肯じ得ないのである．

N.

Madame, allez-vous donc mourir?

H.

Non, pauvre aïeule,
Sois calme et, t'éloignant, pardonne à ce coeur dur,

エロディアッドの死に直面していると信じきっている乳母の問に対する彼女の返答は，論理的には当然肯定でなければならないが，現実の答は否定である．なぜ，美と虚無の緊密な絆を，あれほどよく知っているエロディアッドが，最後の時に，死ぬことをうけいれられぬのであろうか？我々は，ここで彼女が，美の超越性の裏面である，虚無の超越性と衝突したのだと信ずる．最初に我々は，エロディアッドが，美の超越性を克服できるかという問題を提起したが，まさしくここで，彼女は美＝虚無の超越性とぶつかり，その企ては挫折してし

まうのである．確かに，虚無は美の実現ではあるが，同時にそれは，その本質から言って美の決定的消滅を意味している．虚無とは，遂に我々とは関係を持ち得ないひとつの超越なのである．マラルメは，詩，“青空”の冒頭で，青空の永遠の美の皮肉に苦しむ．エロディアッドも遂に永遠の美を体現するには到らないのである．1866年，カザリスにあてて書いたマラルメの有名な言葉，「僕は虚無を見出した後，美を見出した」というこの言葉は，美と虚無の同一性の確認であると同時に，その超越性の確認でもある．エロディアッドが死を受け入れられぬのも，この死によって体現される美が，永遠なものではないということに由来すると思われる．実際，彼女は次のように言葉を続ける．

Mais avant, si tu veux, clos les volets, l'azur
Séraphique sourit dans les vitres profondes,
Et je déteste, moi, le bel azur!

この，青空に対する憎しみは，彼女が青空の永遠性を獲得できなかった反動である．

このようにエロディアッドの試みも挫折してしまうのであるが，では彼女に残された道はどのようなものであろうか？彼女は，未知のものを待つ．

J'attends une chose inconnue
Ou peut-être, ignorant le mystère et vos cris,
Jetez-vous les sanglots suprêmes et meurtris
D'une enfance sentant parmi les rêveries
Se séparer enfin ses froides pierreries.

この未知のものとは何であろうか？それは明らかに，彼女の意識の純粋性を損うことなしに，それを持続させるものである．もしエロディアッドが，このものを手に入れることができたら，彼女は消滅する危険なしに，美を体現できるであろう．しかし，このようなものは本来的に存在しないものであり，待つというエロディアッドの態度そのものが，このものの到来の不可能性を示唆しているように思われる．彼女自身，そのことを知っているのであって，それ故にこそ，彼女の美（冷たい宝石）が，彼女のあげるすすり泣きのなかで，崩壊していくことを予感しているのである．

しかし，我々は存在し得ぬはずの，この未知のものに対する，最後の願いをうたった詩篇を見出す．それが，“白鳥のソネ”と呼ばれている詩篇である．今，この詩篇を考察してみよう．

Le vierge, le vivace et le bel aujourd'hui
Va-t-il nous déchirer avec un coup d'aile ivre
Ce lac dur oublié que hante sous le givre
Le transparent glacier des vols qui n'ont pas fui!

この一節において，白鳥は透明な氷塊として，すなわち，エロディアッドと同様に，純粋ではあるが，不毛性に苦しめられた姿として，あらわれている．他者を捨てることによって純粋になろうとした彼の試みの，必然的反動として，この白鳥は，人々から忘れ去られた世界へと追放されており，絶対的に孤独と不毛性にとらわれている．しかし，第一行において，我々は，おそらく，エロディアッドが待っていたであろうもの，そして，白鳥をこの不毛な状態から解放してくれるであろうものに出会う．それは，エロディアッドにおいては両立し得ぬものであった生気と純粋性を，同時にそなえた「今日」である．もし，純粋性が生気と両立し得るのであれば，不毛性は打ち破れ，美は純粋なままで永遠に存続するであろう．しかし，この「今日」も本来的に存在不可能であって，そのうえ不毛性を打ち砕く道具として，その酔った翼という，脆弱な手段しか持っていないのである．また，この一節全体も，激しくはあるが，実現不可能な願望をあらわしているにすぎない．三重の意味で白鳥は不毛性から脱出することを不可能にされているのである．実際第二節以下では，むしろ白鳥の陥っている不動性と不毛性のほうが，強調されてくるのである．

Un cygne d'autrefois se souvient que c'est lui
Magnifique mais qui sans espoir se délivre
Pour n'avoir pas chanté la région où vivre
Quand du stérile hiver a resplendi l'ennui.

白鳥は，自分の純粋で美しい姿が，その代償として不毛性を持ち，この不毛性に彼が苦しめられ，もはや耐えられないことを知って，そこからとびたとう

とする．しかし，彼自身，自分がそれに成功するだろうという希望を持ってはいないのである．事実，この試みはまったく希望のないものであり，絶対に実現不可能である．なぜなら，もし白鳥が生きるべき世界を歌ったのであれば，彼は現実の生のさまざまな可能性へと，飛んでいけたであろう．しかし，実際は彼は死をうたうことを選択したのであり，この選択は，いかなる可能性をも残さないからである．それに，不毛性とは確かに詩人にとっては，苦悶，白い苦悩であるが，この苦悩を捨てるということは，詩人としての自己をも否認することである．詩人であるからには，書くことが要求する，白い紙を前にしての詩作の苦悶からの逃避は許されないことなのである．

しかし，第三節において，不毛性に対する白鳥の最後の抵抗がうたわれる．

Tout son col secouera cette blanche agonie
Par l'espace infligée à l'oiseau qui le nie,
Mais non l'horreur du sol où le plumage est pris.

ここにおいて，白鳥の飛翔の試みは，「今日」の助力なしに行われようとしているが，この試みはいまやはばたきでさえなく，首をふるという弱々しい運動にまで減ぜられてしまっており，その不可能性が一層強調されている．そのうえ，この白鳥は，自分が飛び立っていくべき空間すら持っていない．彼みずから，不毛な空間以外の空間を拒否しているのである．不毛性は詩作の必然的状況であり，その苦悩そのものが詩なのである．詩人である限り，この不毛性と，その苦悩の呪縛から逃れる術はないのである．

最後の節においては，飛翔の試みに失敗し，不毛性のただなかで凍てついてしまった白鳥の姿が示される．

Fantôme qu'à ce lieu son pur éclat assigne,
Il s'immobilise au songe froid de mépris
Que vêt parmi l'exil inutile le Cygne.

このようにして，白鳥の試みも挫折してしまう．実際，この試みは純粋で，生気にみちた，「今日」の助けなしでは不可能であり，そのうえ，この「今日」そのものが，本質的に存在不可能である以上，この試みは最初から挫折を運命

づけられているのである．もし詩人が，「今日」の助けなしで，敢えてこの脱出を試みるならば，それは詩人としての自殺行為であり，己れの使命の放棄である．詩人であり続けるためには，白い苦悶という，不毛性，否定性を身にひきうけ，それを全力挙げて維持していかねばならない．不毛性とは，確かに純粋な美ではないが，それにしても，それに最も近い状態であることは，以上にみてきた通りである．美をその使命とする詩人は，この不毛性に苦しみながらも，決してそれを離れてはならないのであって，この不毛性に無縁な人々を美に無縁な人々として軽蔑しつつ，不毛性のさなかで生きていくべきなのである．

マラルメはかつて，「人間とは，物質の空しい一形態でしかない」と書いた．だが彼は，この形態が卓抜した形態であることを付け加えることも忘れなかつた．なぜ卓抜した形態なのか？—それは，この物質が詩を持つからであり，ポエジーこそこの物質がなし得る唯一の真正な営みなのであり，ポエジーこそ，人間をして宇宙で唯一つの有意味な存在となすのである．詩によって，宇宙の万物は自己の存在の不安定さを克服し，確固とした存在を与えられる．これがマラルメの根本理念であった．ポエジーとは，詩人としては不毛性を甘受し，また人間としては，虚無に殉ずるという決意に他ならないのである．

付記　引用は「エロディアッド舞台」と「白鳥のソネ」に限ったので，特に引用ページ数をあげなかった．